

# 病床記 ②

月 日 曜 天候

塩 月 佐 一

(佐伯市匠南区)

三月三十一日、東京

に着くと、先に送った南海病院のレントゲン写真による主治医の診断を長男が説明してくれる。

「重度の脳下垂体腫瘍しゅようですが、幸いにも良性でよかったですね。もし悪性のものでしたら

今日まで命はありませんよ。この大きさから考えると、十年や十五年のものではなく、二十年以上たっています」

「眼はお見えになりますか」

「大分悪くなったが見えるはずですよ」

「右眼は恐らく見えなと思います」

(この時、右眼はほとんど見え、失明状態)

「手術致しますか？。成功率は七十%ぐらいです」

「先生ならどうなさいますか？」

「私の身内なら手術します」

「それでは手術をお願いします」

入院は病院の都合で、最初の予定より遅れて四月十一日。そして、十四日に手術の予定だという。

「うん。世話になったなあ。一人で大変だったろう」と、長男をねぎらう。

入院が遅れ、日程に若干の余裕ができた。四月三日、折柄東京は桜の満開。路傍の桜も空地の桜も満開。風が吹けばひらひらと散りこぼれる。幸いに天気もよし。気晴らしに花見と酒落れる。まず手近な石神井(しゃくじい)公園へ行く。ここは思ったより桜が少ない。

六日、靖国神社・千鳥ヶ淵に出掛ける。靖国神社入口から皇居のお濠りに沿って左折すると千鳥ヶ淵。お濠りと相對して延々二、三キロ余り弧を描いた飛行雲のような桜並木。末はビルの谷間に消えているのも東京らしい。桜の下は人人人。立ち止まってゆっくり眺めることもできない。これも東京の花見らしい。

対岸のお濠り端は、きれいな芝生の中に点々と桜が咲いているが、人の気配はおろか犬猫一匹も見掛けない。あそこで、静かに花見のできる日が果たして来るだろう。官庁の中でも特に頭の堅いと言われる宮内庁のこと

大変革でもない限り望めないことだろう。

一キロ程人波に流されて行くと、右手に東京都無名戦死者の墓がある。桜並木から二十メートルぐらいいしか離れていないのに、木立に囲まれたここは別天地。十数名の人が参拝していた。無人花売場に、かろうじて一束残っていた花を二百円入れて買い、参拝する。わが国の要人が渡米すると、ワシントンの無名戦士の墓に参拝するニュースが放映されるが、日本に來た外国の要人が、ここに参拝するニュースは見たことがない。靖国神社や護国神社は日本の物的であるが、無名戦士の墓はもっと庶民的でよい。庶民の捧げる花に埋まり、線香に煙る無名戦死者の墓が、日本の各地にあつてよいのではないか。

四月十一日、いよいよ入院の日。午前八時に家を出る。慈恵医大附属青戸病院は外来患者でごった返していた。入院手続き後、一時間程待つと看護婦が迎えに來た。二五号室、二人部屋に入れられる。初めての入院だが、別にどうということもない。しばらくすると、看護婦が病院内を案内してくれる。これで第一日目は終わる。入浴して昼食まで眠る。入院中は暇があれば眠っていたの

で、看護婦に「いつ來ても眠っているのね」と言われた。四月十三日、敗戦後伸ばした髪を刈り、更に丸坊主にする。そこで手術準備は完了だ。一体、どこをどう切るのだろうか？。考えてもわからない。なるようになるだろうとあきらめようとするが、気にかかる。

「坊主頭がかわいいわね。よく似合うわ」

と、看護婦達に冷やかされる。

四月十四日、いよいよ手術日。（三時間半ぐらいかかるだろう）とのことだが、それはどうでもよい。

八時、寝台車が迎えに來る。そのまま麻酔室に入る。ある人に（寝台車に乗せられて麻酔室へ運ばれるのはいやな気分だ）と言われたが、自分は何とも感じない。あきらめのせいかな、それとも鈍感のせいかな。

五十分ぐらいで麻酔が終わり、手術室へ運ばれる。手術室では、照明灯の下に、五、六人の医師が、手術姿で立っているのが見えたが、間もなく深い深い眠りについた。

気がついたのは、明るい太陽のもとであった。妻や子供達の顔がある。時間を聞くと、四時半という。手術に要した時間は、予定を遙かに越えて六時間半かかっていた。

る。後で、主治医は（下垂体を覆っている血液流が意外に厚く、視神経が圧迫されて紙のように薄くなっていたので、大変時間がかかった）と説明してくれた。このような努力にもかかわらず、吉野紙のように薄くなった右眼の視神経は切れて、後に失明状態になった。

六時間半も手術室の前で立っていた妻は、その間の不安と待ち時間の長さは格別のものがあつたらしい。人は誰でも悪い方へ悪い方へと考え勝ちになるものだから。

病室へ運ばれるまでは知っているが、また深い眠りに入った。この間病室は大変だったらしい。病室にレントゲンを持ち込み、内出血を調べる設備をし、看視態勢を整える。もし脳内出血があれば、それは死につながることで、妻はまた不安にかられたそうである。同室の倉持さんが、

「脳外（げ）の手術の後には、いつもこうするのです。心配には及びません」

と、慰めてくれ、そして力づけてくれた有難さは忘れられないと、未だに述懐している。

手術後二日間は静かに眠っていたが、三日目からそろそろ幻覚症状が現われ、狂人のように暴れ出し、妻や看

護婦に迷惑をかけたというが、二、三の記憶しかない。壁に穴があいていて、そこからいつも弓矢で眉間をねらわれている。いつ殺されるかもわからないという恐怖にかられる。壁の穴から時々鳩時計のように人が現われる。妻が薬を飲ませてくれると、一旦は飲むけれど直ぐ吐き出す。仕方なく看護婦を呼んで飲ませると、おとなしく飲んだという。

点滴の注射針をいつの間にか引き抜くので、血が流れ出す。とうとう腕と足を寝台にくくりつけられた。それでもまだまだ暴れるので、網をかぶせて身動きができないうようにする。（人目を盗んでは病院をぬけ出そう。ここに居ては殺される）と妻を困らせる。（殺人請負人がろう下に来ている。ここから離れるな）とこわがる。

吸入をすると、毒ガスだと暴れる。そして寝台から飛びおりに逃げる。もし、この時転んで頭でも打とうものなら即死だとのことで、看護婦は肝をつぶしたという。それ以後、吸入はもう二度としなかった。が、網はずうととかぶせられた。

妻は（もしこの状態が治らなければ、どうして佐伯まで連れて帰ったものか）と一人で心配し、一週間に七キ

口もやせたという。倉持さんは

「奥さん。心配はいりませんよ。段々良くなりますよ」と慰めてくれた。

「暴れるのは元気の良い証拠ですから回復も早いですよ」と、勇気づけてくれて有難かったという。

幻覚症状もおおよそ治まった二週間目、二人部屋から八人部屋へ移された。ここは整形外科患者が主である。ここには退院前の人も居り、寝台に座り、屈託なく話し合っている。この人達を見て（ここはやっぱり病院だ）と目が覚めた思いがした。私の心もやっと平静を取り戻した。これから回復は早かった。

五月十六日、退院許可が出、即日退院する。

古稀を迎えて初めて入院生活を体験したが、よい体験をした。入院患者の心を少しでも理解することができたのは、これからの人生にとってよい体験になるだろう。健康で一生を終れば、入院生活の心理は、決して理解できなかった。貴重な体験を得た。この体験を生かしたい。

いろいろ考えさせられることも多かった。退院後は、病院でリハビリを受け、七月二日、三か月ぶりに佐伯に

帰った。

（おわり）

### 表紙解説

## 樫野 観音菩薩立像

光世音・観世音（株）。観自在ともいう。密教にあっては阿弥陀如来の化身となし、よって大勢至菩薩と共に阿弥陀仏の左右にあってその教化を賛得る……（仏教大辞典）この観世菩薩は樫野庵寺の阿弥陀如来の脇侍である、この仏様は非常に古い年代の如来でその台座に平安末期、修理した時記した年号がかかっている。観音様も古い造りである。同年代か鎌倉期の作ではなからうか。頸の三道は薄く上半身裸形で胸から腰へかけてやや細くなって、腰は多少張っている瑛珞は散逸したものか一条、衣はたくし上げ足はやや開き気味また上体を少し前屈みにして立っている姿は童児のような印象を与える。

写真並びに説明 軸丸 勇